

「味わい、求めよ」

月並みなお話ではありますが、「あなたの尊敬する人は誰か」と質問されて、今だったら大谷翔平とか、昔なら伊能忠敬とか坂本龍馬とか、あるいは信仰者なら、それはもちろんイエス様とか、そんな風な答えが返ってくるんじゃないかと思います。一方で、ちょっと斜めな視点から考えてみますと、個人的には「納豆」を最初に食べた人は尊敬にするな、と思います。あと、へしこを始めて食べた人もそうですね。ようするに腐った腐敗と紙一重にある、発酵食品を、誰よりも先に食べて、その味と安全性を確認した人と言うのは、華々しい功績じゃなくとも、私たちの食文化を支えてくれている尊い人だと言うことです。同じような考え方で行くなら、食べられるキノコを確かめた人も偉いですよね。食うに困って口にしたのか、好奇心から口にしたのか。そこのところは良く分かりませんが、ともあれ、発酵食品にしろ、キノコにしろ、初めてのものを「味わう」というのは、本来、とても勇気ある行為なんだろうな、と。どんな味かも分からないし、身体に良いのかどうかも分からないものを、受け入れる、ということでもあるわけなので、やっぱり、平然とはしてられないと思います。

今日の聖書箇所は「味わい、見よ、主の恵み深さを」という御言葉から始まります。果たして、最初に主の恵みを味わった人は誰なのか。なかなか答えるのが難しいですね。伝統的な解釈で言えば、アダムさんが最初に味わった人と言えますが、たとえそうじゃなかったとしても、その最初に味わった人が「主の恵みは悪くないね」「良いものだったね」と感じていなければ、御言葉が広まることは無かったかも知れません。私達の教会と言うのは、「主の恵み」を最初に嬉しい、有り難いと感じた人から連綿と続いて来た共同体だと言えます。今日も、こうして礼拝に集い、御言葉を

味わい、そして、感謝の想いを新たにしていきます。「神様、今日もごちそうさまでした」という御礼も間違いではないでしょう。「いかに幸いなことか、御もとに身を寄せる人は。主の聖なる人々よ、主を畏れ敬え。主を畏れる人には何も欠けることがない」。アーメン、その通り。そうやって御言葉に支えられ、養われ、私たちの心と魂は新しい1週間を踏み出す力を頂いています。

ただ、先の話に戻りますけど、私たちにとって、主の恵みも、主の御言葉も、毎日の食卓に上る納豆やヨーグルトのような親しみあるものである一方で、皆さんの中にも、納豆はちょっと苦手とか、ヨーグルトの良さが分からんとか、そういう方々もいらっしゃるように、教会で提供される「味わい」にちょっと抵抗感がある人がいることも、これは、まあ、仕方ないことだと思います。「初めてのものを味わうというのは、本来、とても勇気ある行為」と先ほども言いましたが、教会を知らない方々、神様を知らない方々にとって、この礼拝堂がどう感じられるのか、聖書の御言葉はどう聞こえているのか。それらは、怖くはないのか、怪しくはないのか。そういう風に先回りして考える想像力と感受性を、私たちは忘れないでいたいですね。

初めての人に「ほら、これがへしこ。美味しいから食べてみて」と、米ぬかが付いたままの丸々一匹をポンと渡しても、もらった相手は、それをどうやって食べたら良いのか分からずに、困ってしまうでしょう。まずは、軽く米ぬかを落として、薄く切り分けて、大根おろしとか添えて食べるとうまいですよとか。フライパンでちょっと焼いてみるとご飯に合いますよとか。そういう助言が必要ですよね。実際に、美味しく調理してあげて提供するのでも親切で良いと思います。ようするに、私たちは納豆や、ヨーグルトや、へしこの美味しさも知って、それらを味わうことで日々力付けられている存在ですが、私たちの周りには、納豆が苦手、ヨーグルトも食べたことがなく、へしこって何？という人もいるということ。そして、そんな人に、何の工夫も配慮も無く「これ美味しいから食べてみてよ」って強いるのは、失礼だし、迷惑だということです。本当に食べてもらい

たいなら、相手の好みをちゃんと踏まえて、「あなたのために特別に用意した一皿」という形でお出しするくらいでちょうど良いのでしょう。

ただ、私たちにとって自信に思っているのは、私たちが提供しようとしている一皿の、その素材は極めて良いということです。確かに、好みが分かれ、苦手意識がある人も一定数いるでしょう。今まで、御言葉を宣べ伝えてきたけど、全然受け取ってもらえなくて、もうその一皿を差し出すこともなくなってしまった。そんなツライ過去と、波風立てぬ現在をお過ごしの方々もいらっしゃるかと思います。でも、私たちが差し出してきた、差し出そうとしている一品の素材は、神様から与えられた恵みであり、悪いはずないんですよ。その恵みは、数千年の時を超えて語り継がれ、世界中に行き渡り、数え切れない人たちの人生を導き、人々の倫理観や社会制度の大元となりました。主の恵みは、私たちの心と魂を満たすだけでなく、資本主義とか、民主主義とか、福祉や教育思想など、現代社会に必要不可欠な思想体系の中心となっています。多くの人は、その表面的な「味わい」しか気にしませんが、現代社会の隠し味には「主の恵み」があることは、これは学問的にも否定できないことです。そんな「主の恵み」の実力を噛みしめながら、私たちは「これ、結構美味しいんですよ、良かったどうですか」と積極的かつ丁寧な振る舞いを続けて参りたいと思います。

・・・と言っても、まあ、さんざん主の恵みのフルコースを振る舞い続けて、しかし、いまや誰も見向きもしない、というツライ状況に置かれているのが、今の教会の課題なんですよ、って話でしたよね。でも、これからも私たちが続けていくべきことは、変わらないと思います。何を続けて行くのかと言うと、とりあえず私たち自身が、主の恵みを味わって、楽しく感謝して生きていくことです。教会が、地域にあって、活気に満ちた繁盛店のように見えるなら、それは、とっても素敵な宣教・伝道でしょう。「ここは良い所ですよ」と言葉で伝えるだけでなく、私たち自身の表

情と姿からして楽しそうに見えるというね。だから、もしも、楽しくない、愚痴っぽくなっちゃう、
そうなるくらいなら、ちょっと主の恵みを味わうペースを落として、つまり、時々教会をお休み
して、他の喜びを味わう日曜日にすることがあっても良いと思います。またには納豆じゃなくて、
フレンチトースト食べたいなんて日があってもね、良いんじゃないでしょうか。

ただ、忘れないでいたいのは、やっぱり、私たちは「平和の使者」であるべきということですね。
日曜日をどこで過ごすにしても、宣教や伝道に躓くとしても、色々上手くいかなくても、とりあえ
ず私たちは「平和の使者」。神様の恵みに日々養われて、祈ることを止めず、隣人を愛して大切に
することを続けていく。自分の好みや理想を周りに伝えたくなるとしても、果たして、それが本当
に平和に繋がるのか、と考える。正義は時に悪よりも人を傷付けることがあると知っておく。
あと、想像力をもつこと。「歴史上初めて納豆食べた人ってどう感じたのだろう」と想像するよう
に、「人生で初めて教会に来た人は、どう感じるだろう」と思い巡らせてみる。「主の恵み」という
教会の食文化が、この社会において、どう理解されるだろうかと。

せっかく素晴らしい素材が、私たちはあるわけですから、社会の平和のために、多くの人たちの
喜びと幸いのために、一番良い形で提供できるよう、考え、工夫することを諦めないでいきたいと
思います。今週も、一人でも多くの人と、主による味わい深い日々過ごすことができますように。
最後にお祈り致します。

神様。今日も私たちが豊かな御言葉の食卓に招いてくださり、感謝致します。あなたは日々、聖書を通して私たちに語り掛け、信仰を養う多くの恵みをくださいます。私たちは、その栄養豊富な御言葉を食し、明日を生きる力を頂いています。私達に味わい深い恵みを注いでくださり、本当にありがとうございます。どうか、この良き恵みを、美味しい御言葉を、私たちと隣り合う多くの人たちにおすそ分けし、ともに味わうことができますように。私たちも考えを巡らせ、工夫を凝らし、御言葉の食卓を整えるお手伝いを続けて参りたいと思います。宣教伝道の担い手として、平和の使者として、私たちを十分に用いてください。この世界が、どうか優しく穏やかでありますように。

このお祈りを、私たちの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。

2月召天者を憶える祈り 聖書：ヨハネによる福音書 14 章 1～3 節

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。」

上田キヨ子 うえだ きよこ 姉 (2023 年 2 月 2 日 召天)

松木 清 まつき きよし 兄 (1937 年 2 月 16 日 召天)

山本 順 やまもと じゅん 兄 (2022 年 2 月 18 日 召天)

谷口国夫 たにぐち くにお 兄 (1945 年 2 月 19 日 召天)

中村弘子 なかむら ひろこ 姉 (1999 年 2 月 20 日 召天)

前 伊三雄 まえ いさお 兄 (2017 年 2 月 22 日 召天)

中村ゆき なかむら ゆき 姉 (1995 年 2 月 26 日 召天)

中野敏雄 なかの としお 兄 (2004 年 2 月 26 日 召天)

中野好子 なかの よしこ 姉 (1968 年 2 月 28 日 召天)

神様。私たちは今、2 月にあなたへの御下へと召された兄弟姉妹を憶えて祈りを捧げています。

敬愛すべき信仰の先達のことを思う時、私たちの心はこの世を超えて、あなたの住まう天上にまで及びます。御国の幸いのただ中におられる方々は、必ずやあなたと共に永久の安らぎに身を委ねていと信じます。また、生前に各々成し遂げられた働きに対する十分な報いが天にはあることを信じます。そして、来る日には、私たちもまた天へと帰っていきます。主のご用意くださった場所において、再び相見える時、恥じることなくこの地上での働きをお伝えすることができるよう、どうか私たちの日々の生活と信仰とをあなたが守り導いてください。天には限りない平安がありますように、そして、地にはあなたによる力強い導きと、豊かな慰めをお与えください。

この祈りを我らの主イエス・キリストの御名を通して、あなたの御前にお捧げ致します。